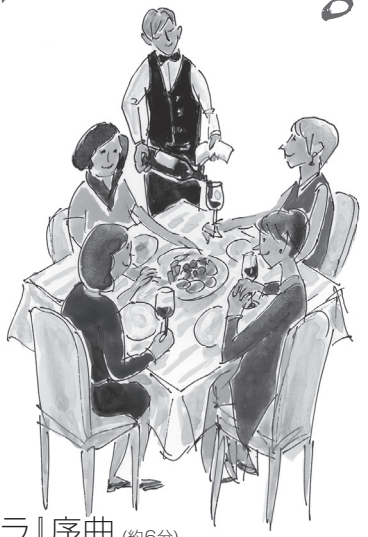
第76回

休日の午後のコンサート。



6.3(日)14:00開演

東京オペラシティ コンサートホール

Sun. June 3, 2018, 14:00
at Tokyo Opera City Concert Hall

〈バッティストーニ東欧への旅〉

Mo. Battistoni's Voyage to Eastern Europe

指揮とお話 アンドレア･バッティストーニ
Andrea Battistoni, conductor & speaker

※プロフィールはp5をご覧ください。
Please refer to p12 for the profile.

コンサートマスター　依田真宣
Masanobu Yoda, concertmaster

グリンカ: 歌劇『ルスランとリュドミラ』序曲 (約6分)
Glinka: "Rouslan and Ludmila" overture (ca. 6 min)

ムソルグスキー: 交響詩『はげ山の一夜』(約12分)
Mussorgsky: Symphonic Poem "A Night on the Bare Mountain" (ca. 12 min)

ベルリオーズ: 劇的物語『ファウストの劫罰』より
「ラコッツィ行進曲」(約5分)
Berlioz: Hungarian March from Opera "The Damnation of Faust" (ca. 5 min)

— 休 憩 (約15分) —

ドヴォルザーク: 交響曲第9番『新世界より』Op.95 (約45分)
Dvorak: Symphony No. 9 "From The New World", in F minor, Op.95 (ca. 45 min)

Ⅰ.　アダージョ - アレグロ･モルト　Adagio - Allegro molto
Ⅱ.　ラルゴ　Largo
Ⅲ.　スケルツォ. モルト･ヴィヴァーチェ　Scherzo. Molto vivace
Ⅳ　アレグロ･コン･フオーコ　Allegro con fuoco

主催：公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra
Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

イラスト：ハラダチエ

プログラム・ノート

解説=柴田 克彦

6/3

バッティストーニがおくるスラヴの抒情、東欧への旅

新シーズン最初の「休日の午後のコンサート」は、東京フィルの首席指揮者バッティストーニがおくる「**東欧への旅**」。サンクトペテルブルクで長く過ごし、旋律美やパッションが母国イタリアと相通じた彼(か)の地の音楽にシンパシーを抱くマエストロが、ロシア、ハンガリー、チェコにまつわる作品を、情熱たっぷりに聴かせます。

中でも注目されるのがドヴォルザークの『新世界より』。バッティストーニと東京フィルは、このほどスタンダード名曲と邦人作品を組み合わせた、セッション録音によるCDプロジェクト「BEYOND THE STANDARD」を開始しました。その第1弾が『新世界より』。『ゴジラ』など伊福部昭の作品とのカップリングで今年4月にリリースされました(ちなみに、5月の「平日の午後のコンサート」で演奏されるベートーヴェンの『運命』も、この後録音を予定)。そこでは、躍動感と生命力に充ちた清新な快演が展開されていますので、今回の生演奏が大いに楽しみです。

©上野隆文

魔物たちが飛び回るロシアのメロディ　2作

東欧への旅、最初の2曲はロシアの音楽です。まずは“ロシア国民音楽の父”**ミハイル・グリンカ**（1804-1857）の**歌劇『ルスランとリュドミラ』序曲**。同国の看板ともいえる名序曲です。1837～42年に作曲された『ルスランとリュドミラ』（1842年初演、全5幕）は、「悪魔に奪われたキエフのスヴェトザール公の娘リュドミラを、3人の騎士＝求婚者たちが救出に向かい、リュドミラは救出に成功したルスランと結ばれる」といった愉しい物語。これは民話に基づくプーシキンの詩に拠っています。

ミハイル･グリンカ
（1804 -1857）

曲は、弦楽器が颯爽と奏でる、駆け巡るような第1主題（第5幕の婚礼の場の音楽）と、流麗な第2主題（第2幕のルスランのアリア）を軸に展開される、プレストの軽快な音楽。作曲者自身「全速力で疾走するような演奏」を求めていますので、弦楽セクションの妙技に耳目が集まります。

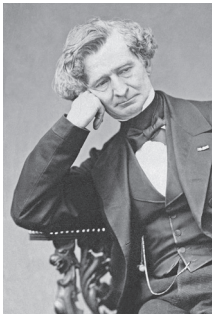
おつぎは、ロシアの国民音楽の確立を図った「5人組」の一人、**モデスト・ムソルグスキー**（1839-1881）の**交響詩『はげ山の一夜』**です。飲酒癖や乱れた生活と相まって未完の作品が多いムソルグスキーですが、本作もその1つとなりました。1860年頃に戯曲「魔女」の付随音楽として着想され、1867年『はげ山のヨハネ祭の夜』として一応の完成をみますが、これはお蔵入り。次いで歌劇『ソロチンツィの定期市』に合唱付きの楽曲として転用を試み、結局は未完に終わりました。しかし彼の死後、5人組の仲間リムスキー＝コルサコフが、最終的なピアノ譜に手を加えた管弦楽版を完成。1886年、現在ポピュラーな『はげ山の一夜』として発表されました。

モデスト･ムソルグスキー
（1839 -1881）

曲は、「聖ヨハネ祭の夜には、悪魔たちがはげ山で酒宴を開く」との伝説に基づく情景を描いたもの。総譜には以下の内容が記されています。「地下から響く奇怪な声。闇の精、続いて闇の神チェルノボーグが出現。闇の神への賛美と黒ミサ、魔女たちの饗宴。狂乱の頂点で教会の鐘が鳴り、闇の精たちは消え去る。夜明け」。音楽は不気味に始まり、めまぐるしい動きが続きます。金管のファンファーレを伴うクライマックスに達した後、鐘と共に静まり、穏やかに終わります。

ゲーテ『ファウスト』から飛び出した悪魔の物語

代わって舞台はハンガリーへ。フランスの革新的作曲家**エクトール・ベルリオーズ**(1803-1869)の**劇的物語『ファウストの劫罰』**より「ラコッツィ行進曲」が前半を締めくくります。1846年に完成された本作は、ドイツの文豪ゲーテの戯曲「ファウスト」に基づく音楽劇で、声楽を伴う全4部の大曲です。その中で最も有名なのが、劇中では「ハンガリー行進曲」と題されたこの曲。悪魔に魂を売ったファウスト博士がハンガリーの草原に立つ第1部の最後、地元の軍隊が行進する場面で演奏されます。「ラコッツィ行進曲」の呼称は、18世紀ハンガリー独立運動の指導者ラコッツィにちなんだ同国の楽曲から主題が採られたことに拠るもの。ベルリオーズは、この曲を入れたいがために、原作にはないハンガリーの場を設けたようです。


エクトール・ベルリオーズ
(1803 -1869)

曲は、金管のファンファーレから行進曲に移り、リズミカルな主題を中心に歯切れよく進行。劇的な中間部を挟んで、壮大な盛り上がりをみせます。

バッティストーニ&東京フィルがつむぐ 名旋律の宝庫、ドヴォルザーク『新世界より』

後半は、チェコ国民楽派の大家**アントニン・ドヴォルザーク**(1841-1904)の**交響曲第9番『新世界より』**。東欧圏の交響曲の中では、チャイコフスキーの『悲愴』などと並ぶ、最上位の人気作です。

アントニン・ドヴォルザーク
(1841-1904)

1892年9月、既に国際的な名声を得ていたドヴォルザークは、ニューヨーク・ナショナル音楽院の創立者ジャネット・サーバー女史からの熱心な誘いに応じて渡米し、1895年4月まで同音楽院の院長を務めました。そして滞在中に、当地で知った黒人霊歌や先住民の音楽の要素と故郷チェコ・ボヘミア地方の音楽の要素を融合させた名作の数々—弦楽四重奏曲『アメリカ』、チェロ協奏曲など—を残しました。その第1弾が、渡米翌年の1893年1～5月に作曲された本作。同年カーネギー・ホールにて初演され、空前の大成功を収めました。

本作におけるアメリカの影響は、先住民の英雄を扱った詩「ハイアワサの歌」から霊感を得たとされる第2、3楽章などに表れていますが、作曲者自身「精神を汲んで作曲しただけ」と述べているように、あくまでイメージ的なもの。現地音楽への共感、新世界アメリカの印象、ボヘミアへの郷愁などが融合した多彩な音楽であり、「新世界“より”」発信された“アメリカ便り”ともいうべき作品です。

曲は、名旋律の宝庫。中でも第2楽章の主題は、後に歌詞が付けられ、「家路」等の名で普及しました。技法的には、第1楽章の序奏部のホルンによる動機が全楽章に登場する点が重要なポイント。さらには、哀愁を感じさせる五音音階とシンコペーションの多用も特徴をなしています。また、シンバルの出番が第4楽章の弱音の一打ちしかないことでも有名ですが、2014年1月の東京フィル定期でバッティストーニが指揮した際(CDも然り)には、最終盤の総奏にも加えられていましたので、要注目です。

第1第章:アダージョーアレグロ・モルト。静々と始まる序奏に続いて、ホルンが奏する序奏の動機に基づいた第1主題、フルートとオーボエが奏する哀感を帯びた第2主題を中心に進行します。

第2楽章:ラルゴ。郷愁に充ちた緩徐楽章。イングリッシュ・ホルンが奏するおなじみの主題を軸とした主部に、クラリネットの旋律に始まる美しくも切ない中間部が挟まれます。

第3楽章:モルト・ヴィヴァーチェ。スラヴ舞曲風ともアメリカ先住民の音楽風ともとれるスケルツォ楽章。歯切れの良い主部に、軽く弾んだ中間部が挟まれます。

第4楽章:アレグロ・コン・フオーコ。力強く進むフィナーレ。行進曲調の第1主題が中心を成し、クラリネットが歌う優しい第2主題のほか、第1〜3楽章の主題も顔を出します。最後は管楽器の伸ばした音が減衰しますが、この終わり方は大変珍しく、本作がただの派手な音楽ではないことが示されているようにも感じられます。

しばた・かつひこ(音楽ライター)/音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。